引言

國立中央大學哲學研究所教授朱建民

本期主題爲「台灣本土生態理念的開展」,生態保育不能掛空地談,因此,「開展」必須同時包含「開創」、「推展」與「實踐」等一連串的活動。生態保育不能脫離實際生活的場域,因此我們必須關心台灣本土的生態問題。雖然「生態」這個概念來自於西方,但它終必在自家土地上紮實地長出自己的形態。這三十多年來,爲台灣生態奉獻的人很多,也很值得尊敬。其中有幾位出現在我們這一期中,如汪靜明、釋昭慧、金恆鑣、陳玉峰等人,他們長期投入台灣本土的生態保育,有理念也有行動,相信他們將來都會在台灣的生態保育史上留有一席之地。

這一期的專題得到多位先生的熱烈回應,最是令人感激。汪靜明教授在百忙中以通訊方式撰寫的大作,內容相當豐富, 其中包含了由理論到實踐的各個面相,讓 我們認識到,全球各地區的生態問題有共 通性亦有其獨特性。換言之,我們固然可以學習西方的生態理念,但是我們也要在 本土的長期經驗研究和關懷中,培養出我們自己的生態理念。汪教授此文論述持 平,涵蓋周延,頗能提供全面的掌握,因 此置於刊首,以爲本期專題引論。

接下來的四篇文章是針對台灣本身的一些生態問題加以探討。昭慧法師以宏觀的角度探討台灣生態環境的結構問題,尤其以台灣的水資源問題為核心。同樣的,金恆鑣教授關心的也是這方面的問題,進而提出新的用水倫理。其次,談到台灣近年來的森林保育問題,就不能不想到陳玉峰教授,他不但對於破壞森林的利益團體口誅筆伐,更親自深入山林走上街頭。黃柏翰先生除了透過訪談記錄,亦從陳玉峰的著作中整理出他的想法。此外,從性廣法師的文章中,我們看到生態保育的另一個面相:動物的保護。在此,我們也可以看到台灣宗教界的實際投入。

以上幾篇是針對台灣本土的生態問 題來談。接著,爲了一覽台灣各界對於生 態保育問題的參與,「台灣當前生態保育 圖像概述」一文分別指出四個區塊:政府機構、民間組織、學術界和一般民眾,做 爲台灣生態理念展開的著力處。本期不能 全面深入討論,只邀請了師範大學生物系 作育英才無數的呂光洋教授,請他談一談 教學過程中希望傳達些什麼,另外也請目 前擔任國家公園解說員的俞錚暞先生,請 他簡單地以第一線工作人員的身分表達 他的一些想法。

專題中最後三篇文章,比較屬於理念

的討論。首先是環境教育界的前輩楊冠政教授,他詳細地爲我們介紹羅斯頓的生態倫理學。有趣的是,葉保強教授則是以美國黃石公園中野牛管理的問題,從另一個觀點檢討羅斯頓等人順從自然的主張。最後,楊勝欽先生討論到更深刻的生態哲學問題,他深入反省了西方環境倫理學中經常談到的內在價值和人類中心等問題。對於上述這些精采的專題文章,我們希望能引發更多的討論。

「環境倫理-可持續性面面觀」研討會

主講人	講題
楊冠政	「生態倫理學的内涵及其實踐」
金 恆 鑣	「建立用水的倫理」
李瑞全	「論永續發展及人與天地萬物之關係:儒家之論述」
文祖湘、蕭再涓	「營建防災、都市規劃與環境倫理」
朱建民、黄柏翰	「從演化倫理學的立場談非人類中心主義的環境倫理如何可能?」
葉保強	「企業公民與永續性之倫理」
Martin Schönfild	"The Kantian Basis of Sustainable Development Resource Use, Categorical Imperative, and Environmental Interaction"
蕭振邦、高柏園	(400) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100) 100 (100)

日 期:2003年6月8日(星期日)9:00~17:30

地 點:國立中央大學 文學院二館 C2-211

主辦單位:國立中央大學哲學研究所